



明治元年（一八六八）詩文局を創設されるに及んで、我が國最初の「詩文史」として登用され、玄米五十石を賜わ

るの光榮に浴し、其の恩命に深く感泣している。  
明治二年（一八六九）五月二十九日京都に於いて病没、享年七十四歳。その墓は京都府船井郡園部町字内林に現在してゐる。

学者及び詩人として君風が残した著書は、詩集として「綠茅村莊詩鈔」正編（乾坤の三冊）、全編縮（乾坤の二冊）の四冊があり、その他「海内詩媒編」、「詩律法門」などがある。

「綠茅莊詩鈔」に採録されている君風の漢詩は、いさかも秀逸にして先人等の評をみても讚辞が多く、まこと詩人と云うにふさわしい。また一方では郷里の戸畑村の平川の塾をはじめ、京都・丹波園部に私塾を開き、ついで藩校教先館の教授として、子弟の教育に孜孜不怠し、更にその晩年には学習院において、高貴の方々へ経学の講義を行なうなど、その生涯の跡をたどつてみると、詩人・教授の士「劉君風」の諸がおのずから溢んでくるのである。

（おことわり）編集者）

以上は八章より成る、梅水先生の序章、その素描である。二九は讀み下す以下各章に、劉君風の字、風、生、世の業績が丹念に解説されてあるが、殊に私が異常に興味したものは、中島子玉と劉君風の交友であった。

そこで梅水先生は先づ、劉君風にあげたように、君風と子玉の交友を百ページの本の中から抜き書きして、教えて會員諸子の目にかけらる次第。もちろん全文梅水先生の著書「劉君風」の中から、序章以下はかすりの省略があることを許されたい。なお、この本はお求めに応じて貸し出すので、電話でも中のみ下されば、何らかの方法でお届けするつもりである。

（中略）

文化十四年の秋、咸宜園の師友瀆染（意はその門下生の中から、特に出色秀才の五子を送んで「五子之詩」を題した。その五子の中は合谷儀作（備者注、合谷は劉君風の別名、中島子玉はいつている。淡窓の五子への賛詩であるが、はじめの三子は瀆染する。それは小淵宮（三十九）、鐘採伊織（二十六才）、相良茂（三十一才））

○合谷儀作（三十一才）

詩家稱列才 我見平川氏 詩家の列才を稱するを、我は見る平川氏 禦寇御風行 飄々不可企 冠き禦風を御して行く飄々企つ 此君有鳳毛 爾也何曾死 此君鳳毛あり、爾も曾て死せし

○中島子玉（十七才）

儂哉南溟鳥 養媒息池埭 儂哉南溟の鳥翼を養い、池埭に 人村觀晚節 誰得抗中郎 人村は晚節に觀る誰か、抗するを得ん 神助或驚疑 鞭策在王良 神助もはげつて、鞭策王良に在り

五子の中では、中島子玉の十七歳はつぐ二十一歳の若さである。此の詩中「此君鳳毛有り」の語によつて、儀作と君風と呼ぶに至つたことは、既に雅号考の所で述べた通りである。

なお中島子玉は、後年郷里佐伯にて藩校四教堂の教授として勤めていたが病没、その没するに臨み自ら口占して、

「三十有六鱗潛ニを欲く、今朝天上へ龍と化して飛ぶ」との一詩句を残している。このことから察するに、中島子玉は龍を以つて自認していたのであらう。

文化十年代の日田咸宜園は、中島子玉の龍、合谷儀作の鳳鳥、友がいに学を授け詩文を競い、まさに龍翔鳳翥多士濟々の門弟を擁していたの黄金時代であった。

（中略）

大坂懐徳堂の詩人として頼山陽らと交わりを結び、京畿の桐名亭の高かつた篠崎小竹菴人は「緑芋村莊詩鈔」の跋文で、

「南豊廣瀬翁社中稱して二龍有り、其の一は別古余識る所の中島子玉にして、往歲すでに上天せり。其の一は別ち劉君石舟にして、數歲前、坂を經て京に入り始め、一途を得たり。然れども未だその龍たるを知らず、頃時その近刻緑芋莊詩鈔ニ卷を贈らる。繕いて之を閱するに、驪珠の光絢爛目と刺し、乃ち龍名の虚ならざるに驚きたり。……云々（原文は漢文である）

鳳麟 君子の交わり (第六章 全文)

劉君鳳と中島子玉は前後して咸宜園に瀨淡窓の塾に入門、咸宜園に於いては、鳳凰は鳳鳥に擬せられ、一方子玉は龍鱗の雄をもつて鳴り、兩者とも其の師に瀨淡窓より大いに囑望され、且つまた同門の人々からはその秀才さを畏敬羨望される程であつた。

君鳳は戸畑村より合谷儀作の名で、また子玉は豊後の佐伯より中島増太の名でそれぞれ入門、年齢は君鳳の方が子玉よりやや長じていたが、宜園に於ける塾生活では常に良い意味のライバルとして、學を競ひ心を磨き、詩文の制作にその優劣を争つた。しかしその親交はまさしく「君子之交」であつたようである。緑芋村莊詩集から中島子玉に贈する詩を拾つてみると、次のような律詩が賦されてゐる。

贈中子玉

一躍龍門在我前

偏忻吾党得顔淵

(兼下し) 中島子玉に贈る

ひとたび龍門におどりておが前に在り

偏に吾党が顔淵と得たり

古今参錯胸無界  
造化操縱筆有權

春誦籠窗花霧々  
夜吟入硯月姸妍

桂林莊裏三年夢  
他日流芳七道天

長崎客舍送中子玉

離樽酒猶在 去影度寒空  
曉有雞聲月 春多馬首風  
詞盟君讓長 交道我知功  
蘇李河梁別 鄉同滯不同

訪子玉於昌平學校

書樓群立際 吟我一声高  
悲喜幾年夢 笑談當日豪  
將教後進慕 幸為先容勞  
愧子悠揚美 此君有鳳毛

右の詩に就いて更に冷たうな補文がある。

「予昌平實に到り未だ従う所を知らず。按上君鳳と呼ぶ者あり、即ち子玉なり。諸後進を呼び来りて見えて、曰く、『此の君鳳毛有りといふ斯の人は是なり』と。此の君の一句姿容先生の句なり。(注、原文は漢文である)

哭中子玉

千人一掃筆端風

千人一掃筆端の風

(中子玉を哭く)

古今を参錯して胸に界なし  
造化を操縱して筆に權あり

春誦してまどにこもれば花あけい  
夜吟して硯に入れば月姸々たり

桂林莊裏 三年の夢  
他日流芳を流す 七道の天

(長崎の客舎に中子玉を送る)

離樽して酒猶在、去影寒空を渡る  
曉有雞聲の月ありて春は多し馬首風  
詞盟して君長を讓る、交道わに功あり  
蘇李河梁のわかれ 郷同に滯して

(子玉を昌平學校に訪う)

書樓群立の際、我を呼びて一声高し  
悲喜幾年の夢、笑談當日の豪  
將に後進の慕うに教えんとす  
愧はずは子悠揚の美、此の君鳳毛なり  
この君の先生の句のために尚す

到延詞場孰競雄 到所詞場孰雄

子玉七未眠始穩 子玉七未して眠り始めて後かなり

普天無限晉文公 普天限りなし晋文公

付記 (編集子)

この後に終章「流風遺韻」がつづき、最後に「累年譜」で終っているが割愛したことを諒とされたい。

梅木先生は且て佐伯中店に教鞭をとられ、後多年利府本宮付属図書館に勤務、現在同大宮文学部講師。「佐伯文庫」について研究が深く、一昨年お招きして文化会館で「講義とお伺いした。この縁で本会客員(賛助会員)として「佐伯史談」は毎号の噴いただいてゐる。

(その講演録音テープ二時間モノ本会所蔵、貸出するで、復習なさつてはいいが。

郷土史話

因尾物語 へその三

牛の頭大明神

― 世利山を歩いての発見 ―

会員 羽 柴 弘

はじめに

堂ノ間(本五村)の三寔江大明神と、因尾(同村)の前高大明神の両社に因、その祭神乎の先世・先国兄弟の、落人としての伝承があることは、よく知られてゐる。これから述べるこの「牛の頭大明神」は、その落人兄弟にかゝるまゝ伝説で、伝へる人々により、おぼろげと違ひがあるが、その原拠となる文献は、大友興廢記卷十三

に出ている。「三寔江大明神之由来」として書かれてゐる。そこで、ここではそれを本筋として検討して見たい。というのは、それが興廢記の筆者が、筆にまかせて虚構な物語を作つたといふのでなく、この表題のことは、ちやんと本五村小川の奥、芹(せり)という奥深い谷間に「大明神」と書かれた石の祠があるから、敢えてとり上げたいわけである。

と云ふで、村の人々はそれを「牛ん頭ん山ん神さん」と呼んでゐるが、この谷が、平ノ光世・先国兄弟の逃避行のコースであつたことは、とんと頓着がないようである。それで一志筋道をたどりながら、若干私の推測・推論を加えながら、解説を加えて見たい。

尚、因尾物語の(三)とほし友が、内容から言えば「小川の芥の物語」であるが、因尾両神社の祭神が、因尾の里目指しての逃避行の途中の物語であるので、特にさし加えたく、この点お念みの上で読んでいただきたい。

① その発端から世利山へへの道

そもそも落人二人が、直見の里まで逃げて来て、まつ白く咲いた一面の蕎麦畑を見て、「なほ海か」と言われ友ので、そこを「猶海(直見)」と呼ぶことになつた、と大友興廢記は書いてゐる。直見の地名が、全くこれに由来するかどうか。少々怪しい。しかし話としては面白いといえる。

と云ふが、すぐ里人に見つかつた。「すわ、落人よ」と攻め立てられ、光世は附に矢傷をうけ、「痛むこと甚だし」(指痕書きは興廢記以下同じ)となり、光世は牛の背に乗り「世利山という深山に紛れ入り」、難波の末「因尾の里に出でたまう」と興廢記の記者は述べてゐる。この辺文脈に乱れがあり、ずい分記述がおちこちになつて